

## 大好き 9 期生

第 10 期 中村 世名

卒業エッセイを執筆するに際して、卒業エッセイとは、どういった目的で書くものなのかという疑問を抱いた。そこで、その答えを求めて、私たち 10 期生直属の大先輩である、9 期生の卒業エッセイを読んでみることにした。しかし、4~5 人分のエッセイに目を通したところで、「9 期生を参考にして良かった試しは 1 度もない」という経験的な示唆を思い出し、そっと OB・OG 会誌を閉じた。ほんの 30 分前の出来事である。

さて、大好きな 9 期生に対する「いじり」を終え、本エッセイで書きたかったことの 8 割は書き終えたのだが、最後に少しだけこの 2 年間の思い出を振り返りたい。ちなみに、ここから先、9 期生の話は一切出てこない。

私にとって、三田で過ごした 2 年間は、全て小野ゼミに捧げた 2 年間だった。ゼミ活動におけるタスクとゼミ運営におけるタスクのことしか考えていなかったといっても過言ではないだろう。特に、3 年生の頃は、常に 1 ヶ月・2 ヶ月先のスケジュールに向けてゼミ生に指示を出し、Web 担当でもないのに毎日のように活動紹介ページの未アップロード資料やアップロードミスをチェックし、論文代表でもないのに論文の 8 割を執筆し、三田祭担当でもないのに買出しやブース設営を行い、入ゼミ担当でもないのに入ゼミ試験当日の全体運営を担当した。加えて、2 年間の解題や、総括、レクチャーの担当回数も同期の中ではもちろん、小野ゼミ 10 年間の歴史の中で見ても、誰にも引けをとらないだろう。

このように、小野ゼミ生の鑑とも言える私の原動力は、小野ゼミが好きという気持ちだった。ゼミのタスクに対して、面倒くさいという気持ちになったことは何度もあったが、辛いと思ったことは 1 度もなかった。次から次へとタスクが振りかかり、その全てに妥協することを許さない環境、そして、そのような膨大なタスクに、文句を言いながらも徹夜で集まる同期達が大好きだった。語学の授業が休講になり、偶然参加した小野ゼミの第 2 回 OP ゼミのクオリティーの高さに魅了されたことが、小野ゼミ入会のきっかけであったが、本当にあの時、小野ゼミの OP ゼミに参加してよかったと思う。おかげで、人生で最も充実した 2 年間で過ごすことができた。このような貴重な環境を作ってくださった小野晃典先生、そして、その環境を僕たちの代まで引き継いでくださった OB・OG の皆様には、心から感謝したい。

私は、来年度から大学院に進学する予定である。これからも数年に渡って小野ゼミに関わっていく者として、自分の研究と併行しながら、先輩達から受け継いだ小野ゼミの良さを後輩達に引き継ぐ手助けができればと思う。最後に、9 期生なんかよりも、同期である 10 期生の皆の方が、大好きだよ。卒業してもゼミに遊びに来てね (はーと)。11 期生については、…紙面の都合上、また来年。